

二席 沖縄県文化振興会理事長賞

非ルートビア同盟

夢月七海

水色の空を見上げると、鮮やかな緑色に覆われている。木漏れ日から零れ落ちた太陽の光が、私の眼鏡に当たってきらきらと反射していた。

五月の後半になると、立っているだけで汗をかいてしまう。あと、赤い指定ジャージを上下揃えたまま着ているせいかもしれない。私はハンドタオルで額を拭った。

今日は体験学習の日で、私たち二年三組はやんばるの森の中を、女性の

ガイドさんに案内してもらいながら歩いていた。

最初は番号順だった縦の列も、今では完全に崩れてしまつて、友達同士のグループに細かく分かれている。私も前を歩く友達と、小声で話しながら歩いていた。ふと、男子よりもずっと前に歩いていたガイドさんが立ち止まり、彼女を囲むように集まつてほしいと指示を出した。

自然と、友達の中で私が一番ガイドさんから遠い位置になる。「ジー」という気の早いセミの声を聞きながら、なんだか友達から離れてしまったことを恥ずかしく思った。私の両隣には、別のグループの女子が立っている。

ガイドさんは、地面から根っこごと抜いたらしい花を何本か持ち、それを列の一番前の子に配っていた。

「これはコバナヒメハギという名前です。皆さん、根っここの匂いを嗅いでみてください。嗅いだ人は、後ろに回してくださいね」

ガイドさんはにこにこしながら説明してくれた。

回ってきたコバナヒメハギの花は、白くてしぼんでしまっているようにも見える。緑色の茎からは直接細長い葉っぱが生えていた。

両隣の二人と一緒に、私も根っここの匂いを嗅いでみる。鼻につんと来る、湿布のような匂いがして、珍しい草だと思いつながら顔を上げた。

しかし、前の友達や、周りのクラスメイト達は、「ルートビアの匂いだっかね」「ほんとだ、ルートビアだ」と口々に言っている。

あれっ？　と思っている私に追い打ちをかけるかのように、片手を上げて私たちの注目を集めたガイドさんが喋り出した。

「はい、皆さんが気付いた通り、コバナヒメハギの根っこからは、ルートビアの匂いがします」

クラスメイト達はへえーと感心していたが、私は別の意味でへえーと思っていた。私は、小さい頃から炭酸が苦手で、ルートビアを飲んだこと

が無い。だから、こんな森の中でルートビアの匂いを知ったことに驚いていた。

そう考えながら左隣を見ると、鶴見さんが不思議そうな顔で小首を傾げていた。彼女は一年生の頃から同じクラスだったが、一番上のグループに所属していて、事務的な話しかしたことが無かった。

白い肌の鶴見さんが、つややかな黒髪を束ねたポニーテールを揺らしながら首を傾げる姿は、同じジャージを着ていても写真の一枚のようだった。でも、その不思議そうな顔は、私と全く同じものだったので、特に深く考えずに話しかけていた。

「もしかして、鶴見さんもルートビア飲んだことが無いの?」

「そうなの」

こちらに顔を向けた鶴見さんは、とても優しく笑いかけてくれた。ちよつと目が細いその顔を見て、私は、彼女が去年内地から転校してきたことを

思い出した。

「そういえば、鶴見さんって神奈川だったよね」

「うん。でも、両親からファストフードを食べるのを禁止されているから、A & Wに入ったことも無いの」

すごい。両親からファストフード禁止なのも驚いたが、エンダーを略さずに言っているのも新鮮だった。

妙に感動している私に、鶴見さんは白いハンカチで首の後ろを拭いながら尋ねた。

「すずえさんも飲んだことが無いの？ ルートビア」

「うん。小さい頃から炭酸が苦手だったから」

「私も飲んだことないよ、ルートビア」

私の右側から、そう言ってくる声があった。

そちらの方に顔を向けると、良子がとつてもニコニコしながら、色黒な

自分の顔を指差していた。

「貧乏だから、エンダーにさえ入ったことなんだよ」

「へえ……」

私は正直、反応に困っていた。

背が低くてセミロングの良子は、母子家庭のためにアルバイトをして、学費を稼いでいる。私たちが通っているのはバイト禁止の高校だけど、金銭面が厳しい子だけが例外として許されていた。そして良子が、高校内で一人だけバイトを許された子だった。

それもあって、良子はクラスで一番浮いていた。どこのグループにも属さず、特に仲のいい友達もない。しかし、私たちに話し掛けた時は、それを感じさせないような笑顔だったため、何と返せばいいのか分からなかった。

そんな中で鶴見さんは、くすりと笑った。

「じゃあ、私たちは三人共ルートビアを飲んだことが無いんだね。それって、すごく珍しいことじゃない?」

「うん。沖繩の人は大体ルートビアを飲んだことがあるみたいだよ」

鶴見さんと良子のやり取りを真ん中で見ていると、あ、普通だ、と感じてしまう。別のグループだからって、全く話したことが無かったけれど、意外な共通点を知った今では、二人がずっと身近になった気がする。

私も、もっと二人と話したくなった。

「この前テレビでやっていたよ。ルートビアは沖繩人のソウルフードなんだから」

「へえ。知らなかった」

「わたし、沖繩生まれだけど、飲んだことないよ」

「私も」

素直に目を丸くする鶴見さんも、不機嫌そうに口を尖らせる良子も可笑

しくて、私はくすくす笑っていた。

つられて、鶴見さんと良子も、声を潜めて笑い出す。

「後ろの三人、お喋りしないで」

この間、ずっとコバナヒメハギの説明をしていたガイドさんは、怒って私たちを注意した。前に立っていたクラスメイト達が、一斉にこちらを見る。

「はい」

「すみません」

「ごめんなさい」

私と鶴見さんと良子は、ほぼ同時に頭を下げる。クラスメイト達の好奇心旺盛な視線に晒されていても、別に恥ずかしくは無かった。

まるで、ずっと前からの友達同士みたいだなーと、やっぱり湿布の匂いにしか思えない、コバナヒメハギを持ったまま考えていた。

体験学習から一週間後、その時学んだことを三、四人のグループに分かれ、レポートにまとめて、壁に張り出すという課題が出された。総合学習の時間、周りはどういつものグループに分かれ始めている。

私も友達の所へ行こうと、自分の席から立ち上がり、振り返った。そして、ひとりぼっちで席に座ったまま、下を向いている良子に気付いてしまった。どうしようと思ったのは一瞬だった。私は、友達にごめんと謝って、良子の方へ行った。別に良子に同情した訳じゃない。あのルートビアの話で笑い合ったことを思い出して、彼女が困っているのなら助けないと感じたからだだった。

私が隣に来て、良子は下を向いたままだった。いつもよりもより小さくなってしまったようだ。

「ねえ良子、私と一緒にレポートしない？」

声をかけると、良子はぱつと顔を上げた。驚いたその顔は、段々と花が開いていくように笑顔へと変わった。

体験学習の後、私はいつものように友達と過ごし、良子とは一度も話をしなかった。だけど、あの時と同じ笑顔を見て、私は心からほっとした。

彼女は本当に嬉しそうに、何度も頷いた。

「いいよ、いいよ。あ、前、空いてるから座って」

「ありがとう。でも、あと一人、誰誘うおうか？」

「良子さん、すずえさん、一緒にいい？」

頭上から爽やかな声が聞こえて、私たちは目を丸くした。良子の前の席に座った私の後ろに、鶴見さんが立って微笑んでいた。

「いいよ！ あ、雪花はこっち座って」

さらりと鶴見さんのことを「せつか」と下の名前で呼んだ良子は、自分の隣の席を指差した。

それから、先生が配ったとりのこ用紙に、記載する記事を考えていく。体験学習で教えてもらったことやあの時撮った写真などを見せ合いながら、計画はとでもスムーズに進んでいた。

「良子、その文字は赤色にしない？」

「いいけど、すずえ、赤色のペン借りてもいい？」

「うん。はい」

「ありがとう。私、お金がないから、新しいペンが買えないんだ」

良子は、こちらが訊く前にそう説明した。全く嫌そうな顔をしていない、無邪気な様子だった。

今まで殆ど話していなかったから知らなかったけれど、良子はあまり自分の家の事情を恥じてはいない様子だった。ルートビアを飲んだことが無い理由も、貧乏だからと言い切っていた。

良子は家の事情に触れられたくないのだと勝手に考えていたが、本人が

こんな感じならば、わざと避けるのもやめた方がいいのかもしれない。

「……良子って、なんのバイトしているの？」

それでも、どこまで踏み込めばいいのか悩んで、一番取り留めのないことを尋ねてみた。

「サンエーでレジをしているよ」

「レジって大変そうね」

鶴見さんがそう訊くと、良子はゆっくりと首を振った。

「今ではもう慣れたよ。もう一年以上はやってるから」

良子は本当に普通のことのように答える。高校で唯一バイトをしていることも、彼女にとってのはただの日常だった。

当時から別のグループだったけれど、私と良子は同じ中学校だった。その頃までは友達と一緒に遊んでいた良子も、高校生になって、バイトを始めて、なんとなく周りからは特別視されていたような気がする。でも、良

子は昔と全く変わっていない、裏表のない朗らかな性格のまま、むしろ距離を取っていたのは私たちの方だった。それを意識すると、とても申し訳なく感じる。

「でも、帰ったら弟たちのご飯も作らないといけないから、そっちの方が大変かな」

「ほんと、すごいね、良子は」

バイトをしたことは無い、食事はいつも母親が作ってくれている私は、良子に対してそんな言葉しか返せない。

私は自分の浅さに反省していたが、鶴見さんは他の点が気になっただらし
い。

「良子ちゃんって、兄弟がいるの？」

「うん。中一と小五の弟がいるよ」

「へえ、三人兄弟なんだ。すずえちゃんは？」

「私は、大学生のお姉ちゃんが一人」

「そうなの。私、ひとりっ子だから、兄弟がいるのは羨ましいな。」

鶴見さんは、少し寂しそうに目を伏せた。

私はその一言が意外だった。鶴見さんがひとりっ子だったことよりも、兄弟を羨ましがるといような、普通の悩みを持っているなんて、知らなかった。

鶴見さんともほとんど話したことが無かったが、家がお金持ちだということは噂で聞いていた。私とは全然違う世界に住んでいるように感じていたけれど、それも結局私のイメージのようだった。

目を伏せたままの鶴見さんに、良子は早口で言い訳するように話しかける。

「あ、でも、私はひとりっ子の方が羨ましいよ。弟なんて、いてもうるさいだけだし」

「お姉ちゃんもね、いつつも家では偉そうで、理不尽な事で怒ったりするよ」
私も良子に同調すると、鶴見さんはやつとくすりと笑った。

「なんだか私たち、ないものねだりしているようだね」

「うん。兄弟の話になると、大体こうなるよね」

「もうあるあるだね」

良子と私も一緒になって笑う。

ずっと喋っていて、肝心のレポートの進み具合は他のグループよりも遅い方だった。でも、もう一度二人と話せる機会があつて良かったと、私は心から思っていた。そうじゃなければ、良子が中学の頃から変わっていないことも、鶴見さんがお嬢さんっぽくないことも、知らないまま学校に通っていたのだろう。

私は初めて、ルートビアを飲んだことが無いことを感謝していた。今まではそれを話すと、大体「沖縄出身なのに！」と驚かれてしまうのが嫌だっ

た。炭酸が飲めないから仕方ないけれど、なんだか自分が責められているような気持ちになった。

でも、良子と鶴見さんも、ルートビアを飲んだことが無いから、「私たちと一緒にだね！」と笑ってくれるだけだった。それが、安心できて、話した回数は少なくても、まるで昔からの親友のように向き合える。

チャイムが鳴り、私たちは名残惜しそうに自分の席に戻っていた。レポートは半分も進んでいないけれど、あと一回これを作る時間が来週ある。私はもうそれが楽しみで、今度は何の話をしようかと考えていた。

六月になって、外はますます暑くなっている。朝の気温も大分高くなつたなと、スマホに入れたアプリでラジオを聞きながら、私は登校していた。

学校の校門が五十メートル先に見えてきた頃、私の後ろからぱたぱたと

走ってくる足音が聞こえた。

「おはよう、すずえー!」

肩を叩かれて振り返ると、良子が満面の笑みで立っていた。

「おはよう良子」

「ねえ、何聞いているの?」

良子がイヤホンをした私の耳を指差しながら尋ねるので、正直に答える。

「ラジオ」

「ラジオ!」

良子が驚きの声を上げたので、私もまんざらではない表情で頷く。

「いつも聴いてるの。アナウンサーさん同士のやり取りとか、リスナーさんからのメールも面白いし」

「へー。どんなメールが来るの?」

「さっきは、リスナーさんのお父さんがテレビを見ながら、最近あの芸人

を見ないなど言ってきて、名前を訊いたら『とつても人のいい松村』って答えたんだって」

「えーと、そんな名前の芸人っていたっけ？」

「それがね、よくよく話を聞いたら、『とにかく明るい安村』を勘違いしてんだって」

「全然違う！」

良子はまるで自分のことのような反応をして、げらげらと笑ってくれた。私は面白くて次々にラジオで聞いた話を喋っていた。

実を言うと、私がいつもラジオを聞きながら登校していることを打ち明けたのは、良子が初めてだった。友達に何を聞いているのか尋ねられたら、その時流行っている曲を聴いているのだと誤魔化し続けていた。

嘘をついているというよりも、私の趣味をずっと秘密にしていたという思いが強かった。友達の中には、ラジオを聞いている人は一人もいない。

だから、唯一ラジオ好きな私は、いじめられることは無くても、変わった趣味があるんだというレッテルが貼られてしまう。

私にとって、あのグループにいるのは大切な友達だけれど、この関係を続けていくためには、あの中で目立たずに振る舞うことが必須だった。みんなと同じように、流行の曲を聴いて、人気の俳優のドラマを見て、休み時間は新しく出来たお店の話で盛り上がる。それが私たちの普通というよりも、義務のようなものだった。

でも、良子はそんなことを強要しないだろうと信じていた。相手が自分と違うからと、線引きをすることは無い。自分もちよつと変わっているから、変な目で見られる気持ちがかかるのかもしれない。

ルートビアを飲んだことがないという共通点がきっかけで話したけれど、まさか良子のことをここまで信用できるなんて、私自身も思っていなかった。自分の一番の秘密を明かしたつもりだったけれど、あまり悪い気

はしないのは、そのせいだろう。

そうして歩いている間に、良子と校舎の中に入っていた。靴箱で靴を上履きに履き替えた後、私はスマホからイヤホンを抜いて、まとめてから肩に下げていた鞆の中に入れた。

先の上履きに履き替えた良子は、靴箱エリアから出て、鼻唄を歌いながら待っていた。

二人で二階の教室へと向かう。それまで、ずっと良子は「明日があるさ」を鼻唄で歌っていた。鼻唄だけでも、彼女の歌はメロデ

イーが合っていて、声も澄んでいるように聞こえた。

「良子はその歌好きなの？」

「うん。お母さんがいつも歌っていたから」

今にもスキップしそうな上機嫌さで、良子は答えてくれた。

教室の前に辿り着き、私が先にドアを開ける。半分くらいのクラスメイ

トが登校していて、それぞれ好きなように過ごしていた。

ふと、前から二番目の席に座って、スマホを眺めていた鶴見さんが顔を上げ、私たちと目が合った。彼女が笑顔を作ったので、私たちもそちらの方へ向かう。

「おはよう、鶴見さん」

「雪花、おはよー」

「すずえちゃん、良子ちゃんおはよう」

スマホを持ったままこちらを見上げた鶴見さんと挨拶を交わす。すると何か思いついたように、鶴見さんが切り出した。

「ねえ、ラインのID交換しない？」

「うん。いいよ」

私も自分のスマホをスカートのポケットから取り出したが、良子は申し訳なさそうに頭を下げた。

「ごめん、私、ケータイ持っていないの」

「あつ、そうだったんだ」

私は一瞬目を丸くしてしまっただが、出来るだけ平常心を装って答える。鶴見さんも困ったように両眉を下げていた。

「それなら仕方ないね」

しかし、私と鶴見さんのID交換を止めるわけにもいかず、私たちは二人で粛々とスマホを操作した。

「登録できたよ。ありがとう、鶴見さん」

「どうもいたしました。……ところで、すずえちゃん、あの、一つお願いがあるんだけど」

鶴見さんが突然声を潜めたので、私も思わず小さい声で訊き返す

「何、改まって」

「私の事、鶴見さんじゃなくて、下の名前で呼んでくれない?」

「あっ」

完全に盲点だったので、私は咄嗟に手で口を塞いだ。

今まで私は、男女関係なく他のクラスメイトは下の名前を呼び捨てにしていたのに、鶴見さんだけは「鶴見さん」と呼んでいた。その理由らしいものは何もなく、雰囲気で苗字にさん付けしたままになっていた。

せっかく仲良くなれてきたのに、これでは彼女に失礼なのかもしれない。

「ごめんなさい。これからはそうするから。……雪花」

私のぎこちない名前呼びに、鶴見さん、いや雪花は、嬉しそうに微笑んでくれた。

そんなやり取りを、手をぶらぶらさせながら眺めていた良子が、「ねえねえ」と口を挟んできた。

「だったら、雪花も私たちの事、ちゃん付けしないで欲しいな。あんまり慣れていないから気恥しくて」

えへへと頬を搔く良子に同意して、私も横で大きく頷く。ちゃん付けされるたびに、私も多少のむず痒さを感じていた。

「うん。これからはそうするね、良子とすずえ」

雪花もそう言った後は顔が赤くなっていた。私もきつと、同じような顔色になっていたのだろう。

なんだかこういうやり取りは初々しいながらも懐かしくて、昔はこうやって友達を作っていたのかもしれないと、ぼんやり思っていた。

休み時間の終わりのチャイムが鳴るのを、こんなに楽しみにしていたのは初めてだった。一週間ぶりの総合の時間が訪れ、レポートの続きを作るために、私と雪花は良子の席で落ち合った。

「じゃあ、今度はやんばるの森を行った時だね」

机に広げた書きかけのとりのご用紙を前にして、私は良子と雪花を見回

した。

森の中でガイドさんに教えてもらった、植物や鳥の情報を思い出しながら、私たちは何を書こうか話し合っていた。

「コバナヒメハギのことは絶対に入れたいね」

良子の提案に、私と雪花も頷いた。私たちはその草の根の匂いがきつかけで話をしたのだから、人一倍思い入れがある。

雪花がデジカメでコバナヒメハギの写真を撮っていてくれたので、それを印刷して載せることに決まった。その後、コバナヒメハギの説明文を考える。

「と言っても、説明文は一言くらいでいいよね」

「うん。根の匂いについて書いたらいいと思う」

私と良子の話を間で聞いて、雪花も何度も頷いている。

「ねえ、匂いの説明には、湿布やルートビアのような匂いがしますって書

かない？」

目を輝かせた雪花の提案に、良子は「それいい！」と大きな声を出して、早速写真用にかけていたスペースの下に、雪花が言った通りの言葉を書き始めた。

一方、私は雪花の一言が衝撃的で、未だに何も言えなかった。クラスメイトの殆どは、コバナヒメハギの根の匂いを、ルートビアのようだと思っただ。でも私たち三人はルートビアを知らないから、湿布の匂いのようだと思っていた。

コバナヒメハギの匂いを湿布のようだと最初に書くことが、自分たちがルートビアを知らないということをしさやかに主張しているようで、またはそのことを馬鹿にしてきた人たちへの反撃のようにも感じられた。ちよつと大げさすぎるのかもしれないけれど、私が密かに抱いてきたもやもやを、雪花はあっさりとした言葉で流してくれたような気持ちだった。

「……雪花、それ、とってもいい説明だよ」

「ふふつ。すずえもそう言ってくれて嬉しい。ありがとう」

やっと振り絞った私の返答に、雪花は微笑しながらお礼を言ってくれた。ありがとうと言いたいののはこっちの方なのに、まだ遠慮してしまって、それを上手く伝えられないのが歯痒かった。

その間に、良子は文の最後の「。」まで書き終えた。そして、背筋を伸ばしたままその文章を眺めている良子が、不意に一言漏らした。

「でも、一度でいいからルートビアを飲んでみたいね」

えっ？　　と思つて良子の顔を見る。だが、言った本人は無意識だったよ
うで、私のことを全く気にしていない。

「私も、湿布みたいな匂いをする飲み物って、どんな味がするのか気になるな」

そこへ、雪花も同意するので、私はさらに戸惑ってしまった。

考えてみれば、良子はお金を貯めたら、雪花は両親に秘密にしたら、エリダーに行つてルートビアを頼むことが出来るのだった。私のように、炭酸が苦手という訳じゃないので、飲むことだけなら、すぐに出来るのだから。

その時、雪花が私の方を向いた。黒い宝石のような両目が、私の顔を見据える。

「すずえは、ルートビアを飲みたい？」

「……………私は、炭酸が飲めないから」

正直に答えたけれど、はつきりと言い切ることが出来なかった。それでも、自分の声が嘘のように聞こえてしまう。

「そっか、仕方ないね」

雪花は、ほんのちよつとだけ、本当に少しだけ、寂しそうな顔をした。良子も、ちらりと私を見て、何も言わずにとりのこ用紙に視線を戻す。

私は、自分と二人の間にある溝に気付いてしまった。三人はルーツビアを飲んだことが無いという共通点がある者同士だと思っていたけれど、その内実には大きな違いがあった。

炭酸を我慢して飲むことは、私にも出来るけれど、初めてルーツビアを飲む瞬間の、期待感を共有することは出来ないんだ。それを意識してしまった瞬間、私一人だけが小島にいるような気持ちになった。雪花と良子のことを嫌いになった訳ではないけれど、今までずっと抱いていたわくわくは、波のように引いてしまった。

色褪せてしまった景色の中でも作業は進み、残りは写真を貼るだけになった。

「あとは私が写真を印刷して、貼っておくよ」

体験学習の時に、唯一デジカメを持っていた雪花がそう提案した。

「おねがい。私も手伝えたらよかったけど」

放課後はバイトがある良子が、申し訳なさそうに頭を下げる。

「私からも、おねがいします」

こういう時は、帰宅部の私も手伝うべきだったが、口からついたのは全く予想だにしない一言だった。

「うん。任せて」

雪花は、私に詳しい説明を求めずに、素直に頷いていた。完全に自分の役目を全うしようとする彼女の真っ直ぐな眼差しに、私は何も言い返せない。

私は気にしすぎているという自覚はあったけれど、今はもう、二人とどんな顔をして話せばいいのかさえ、分からなくなっていた。

それから、私は意図的に雪花と良子を避けるようになっていた。挨拶をされたら返すけれど、こちらから深く話すことは無かった。

時々、登校中に良子を見かけても、適度な距離を保って、追いつかないように歩いていた。微かに風に乗って、良子が鼻唄で歌っている「明日があるさ」が聞こえてくる。

小柄だけれど背筋を伸ばした彼女の姿を、ラジオを聞きながら眺めていると、私がラジオ好きだということが周りに全く広がっていない事に気が付いた。別に秘密にしてと言っていたわけではないのになぜだろうと考えていたら、良子にはそれを話す相手がいないことを思い出してしまった。

教室に入ると、自分の机に座った雪花が、周りの友達と一緒に談笑していた。雪花も私も、今いるグループから離れたという訳ではなかったから、これが普通だ。ふと、雪花と目が合い、彼女の方から優しく微笑んだ。私は会釈を返す。

いつも通り、前とは何も変わっていないと言い聞かせるように思いながら、自分の席に座り、鞆を開けた。

カレンダーは六月の末、今日から期末試験が始まる。クーラーが稼働し始めた教室の中で、これからのテストに向けて、みんなそわそわとし始めているようだった。

テスト期間はあつという間に抜けて、学校全体がこれからの夏休みに向けて浮足立っているようだった。外では七月の青空と日差しが眩しい。

今日の授業の殆どでテストが返却されて、クラスメイト達はその点数に一喜一憂している。私も得意の国語の点数は平均よりも上だったが、数学は少し低かった。この学校では席次が貼り出されることは無いのだけれど、やはり自分や周りの順位は気になってくる。私自身の席次は成績と一緒に渡されるのだが、一学期は百番以内に入れるのだろうか。

放課後、教科書と一緒に返されたばかりのテストを鞆に詰めながら、私はそんなことを考えていた。

「……すずえ」

そのため、私の机の前に良子が立っていることに、声をかけられるまで気が付かなかった。

はっと顔を上げると、何かに追い詰められたかのように苦しそうな表情をした良子と目が合った。こんな姿を見てしまうと、友達とかそうじゃないとか関係なしに、ただただ心配になってくる。

「どうしたの?」

尋ねてみるが、良子はすぐには答えない。目を下の方に泳がせて、何も持っていない指を組んだままだった。

私は最初の心配を忘れて、良子の煮え切らない態度に段々苛ついてきた。

そしてやっと、彼女がぼそりと呟いた。

「ねえ、ちょっと誰もいない所で話せない?」

「私は別にいいけれど、良子はバイトじゃないの?」

しまった。言った側から後悔する。私は、わざと意地悪な言い方をしていた。

「今日は休みだから」

しかし、良子は全くその事を気にせずに、普通に答えてくれる。

私って汚いなど、疲れた心で思う。こちらが勝手に避けていたとはいえ、困っている相手には何かをするべきなのに。

それに、良子は私の態度が気にならないくらい、切羽詰まっているようだった。相談内容は全く分からないけれど、力になりたいという気持ちは自然と芽生えていた。

「校舎の裏の方に行ってみようか」

「……うん」

まだ暗い顔のまま良子は頷いた。

私たちは鞆を机の上に置いたまま席から立ち、教室を出て、廊下を横切

り、階段を下りて、上履きのまま外に出た。ひさしの下のコンクリートの上、窓が付いていない壁の真横で立ち止まる。その間、良子は黙ったまま、私の後ろをついて来た。

改めて、良子と向かい合う。彼女はまだ、不安そうな顔のまま、いつも伸ばしている背筋を丸めていた。

夏の入り口の空は驚くほど澄んだ青で、その中を大きな飛行機が灰色のお腹を見せながら飛んでいた。その轟音が通り過ぎた後、意を決したように良子が語り始めた。

「掃除の時間でね、私、雪花の机を前に運んだの」

「うん」

良子の掃除の担当場所が、教室だということは何となく把握していた。私は第二理科室の担当だったので、良子に何が起こったかまでは知らない。「その時、雪花の机から裏返しの紙が落ちちゃって、私はそれを拾って、

見たの。それは国語のテストだったんだけど、……点数がとっても酷かった」

良子は吐き出すようにそう言った。その顔には、雪花のテストの点数を見てしまった罪悪感に何故か恐怖が含まれていて、私は混乱する。

「そんなに悪かったの？」

「悪いというか、赤点だった。解答も半分も出来ていないような状態で。国語が苦手なのかなって思ったけれど、文字が左右反対になっている所があるのも気になって」

「テストの日、雪花の調子が悪かったのかもしれないよ？」

「ううん、あの日は普通そうだった。多分、もっと違う理由があると思う……」

自信がなさそうな良子の声は、段々と小さくなり、最後にぎゅつと彼女は口を一文字に結んだ。

しかし、良子の主張は、私にも心当たりがあった。

レポートを作るとき、雪花は文字を一度も書かなかつた。見出しの色を塗ったり、周りに枠線を引いたり、小さなイラストを加えたりなどの細かい作業を担当していた。

ただ今は、雪花のテストの点数やその理由よりも、気になることが一つあった。

「このことは、雪花に話しているの？」

私の質問に、良子ははっと息を呑んだ。見る見る頬から血の気が失い、瞳に感情の揺れが映る。喘ぐように口で呼吸した彼女は、喉から張り付いていた声を零した。

「……まだ、誰にも言えていない」

やはりそうだった。私が納得した表情になると、良子は急にしゃがみ込んで、顔を覆った。

「だって、これは、きつと、雪花がずっと秘密にしていたかったことだよ？ それを見ちゃった私を、多分雪花は許さないと思う」

掌越しに、良子のくぐもった声が淡々と聞こえる。体はもつと丸くなっていた。

私には、良子の不安が痛みと共に伝わってきた。思いがけず友達の秘密を知って、彼女に騙されていたという気持ちよりも、相手を裏切ってしまったという罪悪感の方が強かったようだ。

それを自分の秘密として、心の奥底にしまい込んでいることが出来る人もいるけれど、良子はそういうタイプではない。現に今、私にこの話をしってしまったている。

秘密をそのまま秘密にしていたままでは、彼女がさらに苦しむのが、私には見えていた。

だから、私は良子と同じようにしゃがんで、こう提案した。

「良子、テストの点数を見ちゃったこと、正直に雪花に話そう」

良子は勢いよく顔を上げた。そこには、嘘でしょ？ とはつきりと書いてある。

私は、そんな彼女に畳み掛けるように喋った。

「気持ちにはよく分かるよ。でも、良子は雪花とこれからも友達でいたいんでしょ？ それなら、下手な隠し事はしない方がいい。良子がどんどん辛くなるだけだから。テストを見てしまったのは、わざとじゃないってことを伝えれば、雪花も怒らないよ。私も一緒に謝るから」

まだ震えたままの良子の肩に、私は優しく手を置いた。良子は今にも泣きだしそうな顔で、私を見上げている。

「雪花は、許してくれるかな」

「それは断言できないけれど、雪花を信じよう」

良子の不安を掬い取るように言うと、彼女はしつかりと頷いてくれた。

そのまま、良子は呟いた。

「雪花、まだ学校にいるかな」

「ラインを送ってみる？」

私は早速自分のスマホから、雪花へメッセージを送る。内容は当り障りのないように、少し話がしたいから良子と待っていると、今いる場所を説明した。

数分後、雪花から返事が来た。

『今、職員室を出た所。すぐ着くからね』

どうして学級委員長とかでもないのに、雪花は職員室にいたのだろうかと思っただが、まだ帰っていないのは好都合だった。

その間、私は良子と横並びに立って、夏の足音がする日差しの中で、何でもない話をしていた。

「もうすぐ夏休みだね」

「うん。夏休みには、すずえと雪花と一緒に、どこか行きたいな」

「海とか？」

「海もいいけど、私、もっとやりたいことがあってね、」

良子の言葉の途中で、雪花が現れた。きよとんとした顔で、私たちを交互に見た。

「どうしたの、二人共」

「ごめんなさい！」

雪花の質問に答えるよりも早く、良子が頭を下げた。

良子は頭を下げたまま、目を丸くしている雪花に構わずに話し出した。

「私、雪花の国語のテスト、見ちゃったの！」

「え……あれ、見たの？」

雪花の顔と声に困惑が滲む。怒っている様子は無かったが、私も慌てて良子を援護する。

「わざとじゃなかったから。机からテストが出てきて、見えちゃったただけだから」

「別に、良子のことは疑っていないよ。でも、びつくりしたんじゃない？」
雪化が心配そうにそう尋ねるので、恐る恐る顔を上げた良子は、小さく頷いた。

良子は嘘が付けられない性格だなーとと思っている私の前で、雪花はなぜか悠々と笑っていた。

「私、実はディスレクシアなの」

「……ディスレクシアって、何？」

「日本語で言ったら、読字障害とか識字障害かな」

口から滑り出た私の疑問にも、雪花はにこにこしながら教えてくれた。

「私は小さい頃から文字の読み書きが苦手だった。私の目には字が、ずつと動いているように見えるの。書こうとしても、簡単な漢字を間違えたり、

鏡文字になってしまったり。だから、テストの時間内に問題を読んで解くことが、難しくなっちゃう」

予想だにしない雪花の秘密に、私も良子もぽかんとしていた。勉強するのは私たちよりもずっと大変なのだろうとしか思えなかった。

「二応、みんなと同じように勉強して、テストも受けてるけれどね、やっぱり、黒板の清書をするのは昔から苦手で。だから、それぞれの教科の先生にお願いして、授業の内容をメールで送ってもらって、テストもまた別の日に受けてるから、大丈夫」

私たちの心配を読み取ったのか、雪花はそう言い切ったのだけれど、それでもどこか寂しそうだった。

「その事は、クラスのみんなにも秘密にしていたの？」

私の質問に、雪花の表情が少しだけ暗くなった。

「私は昔からこうだったし、ちよつとした工夫で字も読めるようになるか

ら、あまり気にしていないけれど、私の両親はディスクレシアってことをあまり知られたくないみたいで。ちよつとしたことでいじめが始まることがあるから、気持ちも分かるけれど。それでも、いつか、私が治ると思つて、みんなと同じ教育を受けさせようとしてるの」

雪花は溜め息を吐いて、まだ語りだす。

「食べているものが悪いのかもしれないからって、小学六年生でディスクシアって分かった後に、健康食品とかを買うようになってね……。そうやって治る障害ではないことも、先生はちゃんとやってるけれど、辞めようとしなくて、余計に食べ物にこだわるようになって……」

段々と伏し目がちになりながらも、雪花は自分がどうしてファストフードを食べさせてもらえないのかを教えてくれた。

雪花がルートビアを飲んだことが無い理由は、親が健康志向だからというとしか話してくれなかった。その理由を話せば、自分がディスクシア

だということをお明かしてしまふからだろう。

私も雪花が一言しか言わなかったから、両親から食べるものを指定されている辛さや苦しみなどを考えたことが無かった。きつと、友達と一緒にマックやエンダーでポテトをつまみながらお喋りしたことや、コンビニに寄って新商品にはしゃいだことも、なかったのかもしれない。雪花は両親に嘘を付けなくて、友達からの誘いも断っていたのだろう。

まだ表情の冴えない雪花を前にして、良子も自責の念が消えていないようだった。

「ごめんね、なんか、嫌なこと思い出させてしまったみたいで」

それを受けて雪花は、慌てて何度も首を振った。

「ううん。気にしないで。私もずっと、みんなのことを騙しているみたいで、申し訳なく思っていたから、むしろいいきっかけになったよ。……本当は、もっと早く言いたかったけれど、みんな私のことを頭がいいって思ってい

るみたいだったから、なんだか余計に言い出しにくくて……」

雪花が苦笑して話してくれた内容は、私にも心当たりがあった。

神奈川から引越してきた、背の高くて色白で、お金持ちの転校生というだけで、私たちはすでに雪花のことを特別視してしまっていた。きっと彼女は私たちよりも賢いのだろうか、私たちとはそもそも住む世界が違うのだろうか、まるで彼女が別世界の住民のように見えて、それが雪花の孤独に繋がっていることも知らずに。

だから私は、ルートビアを飲んだことのない、兄弟に憧れている、そして文字の読み書きが苦手な、等身大の雪花の姿に、安心感を覚えた。

「私は、雪花がデイスレクシアだと知れて、嬉しいよ。私には雪花の悩みを測ることは出来ないけれど、友達として、本当のことを話してもらえたから、もつと力になりたい」

初めて私は、雪花のことを、正面から「友達」と呼んだ。気恥ずかしさ

など微塵も感じていない。多少の後ろめたさは、未だに感じるのだけれど。ちよつとしたことで距離を取ろうとしたこともあった。でも今、雪花の秘密を聞いて、自分が雪花に抱いていた偏見も意識して、それを踏まえて、彼女の「友達」になりたいと、正直に感じた。それは、良子に対しても同じだった。

「私も、あんなこととしてしまったけど、雪花に信用される友達でいたい」私の隣で、良子も真剣な顔で頷く。

それを見て、やっと雪花も自然な笑みを浮かべた。

「あのね、ついでにもう一つ、二人に見てほしいものがあるの」雪花は本当に嬉しそうに、スカートのポケットからスマホを取り出すと、それを操作し始めた。それを私たちの方に向ける。画面に写っていたのは、ボールペンで描かれた四コマ漫画の写真だった。

最初のコマでは、コーンの二段アイスクリームを持った男の子が、直線

で描かれた崖の上を歩いている。次のコマで男の子は転んでしまい、アイスクリームが崖の下に落ちてしまった。三コマ目でアイスクリームは一回転して、四コマ目で転んだままの男の子の手の中に、コーンがすぽんと収まった。二コマ目から少年が転んだままの四コマ目まで、崖を現す縦の線は繋がっている。

正直私と良子は、雪花の告白を受けた時よりも戸惑っていた。分かるのは、この絵が雪花の絵柄にとっても似ていることくらい。

「えっと、これ、雪花が描いたの？」

私が尋ねると、雪花は顔を赤くしながら満面の笑みで頷いた。

「私、将来はギャグ漫画家になりたいの」

あまりに突拍子のない雪花の言葉に、私も良子も絶句した。人の夢に対してこんな表情をするのは失礼だと分かっていたけれど、目の前にいる雪花と「ギャグ漫画家」という単語が上手く結びつかない。

私たちの混乱を置き去りにして、雪花は目をキラキラさせながら語る。

「私は、本を読むことも苦手で、友達が面白いって言っていた漫画も、あまり楽しめなかった。でも、ギャグ漫画だけは、絵だけ見て、みんなと同じように笑えるのが嬉しかったの。両親は、頭が悪くなるからって、漫画を読むことを許さなかったけれど、友達からこっそり借りたり、学校帰りに古本屋で立ち読みしたり、スマホを持ってからはそれで読んだりして、つたないながらも自分で四コマ漫画を描くようになって……」

雪花は、「こんなことの話すのは、初めてで」と照れながらも、本当に嬉しそうに話してくれた。

こんな姿の雪花を見るのは初めてだった。他の友達と話している雪花は、その輪から一步離れて笑っているような印象だった。周りが手を叩いて爆笑していても、彼女は口元を隠して笑っていて、いつも上品だなんて思っていた。

でも、今の雪花は、良子からの「どんなギャグ漫画が好きなの？」という質問に、「うーん、一番は決められないかな。売っている漫画も面白いし、ツイッターとかで上がっている漫画も面白いし。でも、昔の、赤塚不二夫とかも好きかな」と答えて、スマホの画面に自分の好きな漫画のエピソードを写して、げらげら笑いながら話す雪花は、普段の教室の様子とはかけ離れていた。

きつとこれが、雪花の自然体なのだ、私はやっと納得することが出来た。周りのイメージのせいで、ずっと自分の秘密が言えなくて、本当に好きなもの話も出来なくて、そんな雪花の寂しさや苦しみを、私は全て汲み取れないけれど、彼女と一緒に話すことで、心から笑える瞬間がより多く作ることが出来たなら、なんて素晴らしいことだろう。

「私、あんまり漫画読んだことなかったけれど、これ、すごく面白いね！」
「そうでしょ？　まだまだ、面白い漫画はいっぱいあるよ！」

お腹を抱えて笑う良子に、雪花は笑いすぎて目尻に浮かんだ涙を拭いながら言った。ちよつと蚊帳の外になってしまった私も、話に加わる。

「私も一緒に読んでもいい？」

「もちろん！」

「いいよ！」

雪花と良子が、声を合わせて頷く。それがまたおかしくて、私たちはまた幼い子供のように笑い合った。

とても些細なきっかけで、私たちは言葉を交わした。個人的な反発もあつたけれど、二人と友達になれて本当に良かった。お互いに秘密にしていた趣味も悩みも夢も、三人でいたらあつさり包み込めてしまう。昔から掛けていた色眼鏡も、あつけなく割れて、新しい世界が開けていく。

三人で校舎の裏で、雪花が見せてくれる漫画を読んでいる間に、時間は随分と経ってしまって、西の空が黄色く染まり始めた。木々に囲まれたこ

の場所は、周りよりも暗くなるのが早い。セミの声と一緒に、グラウンドで練習する運動部の声がほわんほわんと響いていた。

そろそろお開きかなという雰囲気になった中で、雪花が口を開いた。

「ねえ、明日の放課後も読んでみない？」

「放課後と言わずに、休み時間に読もうよ」

「うん。チャイムが鳴ったら、すぐに雪花の席に行くよ」

放課後まで待てない私が胸を高鳴らせながら提案すると、良子は頬を上気しながら賛成した。良子にとっては、久しぶりに友達と過ごす休み時間になりそうだから、心から楽しみにしている。

私たちは自分の鞆を取りに一度、教室に戻った。ずっと教室に残ってお喋りをしていたらしい一つの女子グループが、驚いて私たちを凝視していた。まあ、珍しい組み合わせだよねと、自分たちを客観的に見て苦笑してしまう。でも、別にそれが嫌なわけではなく、むしろ得意気になっていた。

これが私の新しい友達だから、恥ずかしがる必要はないし、誰にも文句は言わせない。

そのまま私たちは一緒に正面玄関から外へ出る。その間、話が途切れることは無かった。夏休みにやりたいこと、私の好きなラジオのこと、良子がよく歌う唄のこと、雪花が食べてみたい料理のこと、話題は全く尽きそうにない。

だけれども、校門を出たらそれも終わってしまう。私は左へ、良子は右に進み、雪花は高校前のバス停でバスを待たなくてはいけない。

「じゃあね、雪花、良子」

私は名残惜しく、二人に向けて手を振る。

「また明日」

「バイバーイ」

雪花も少し寂しそうに小さく手を振り、良子は人目も気にせず大きく両

手を振っていた。

私は歩き出した。顔は自然と上を向く。左手側はオレンジ色を段々濃くしていくが、空のてっぺんはまだ、宇宙に繋がる青色だった。

明日、学校に行くのが楽しみで、こんな気持ちになるのはいつ以来だろうと考えながら、一步一步を確かめるように踏みしめた。

光陰矢の如しということわざがあるのだけれど、全くその通りで、私たち三人の楽しい日常はあっという間に過ぎていき、七月の下旬、高校は夏休み一日目を迎えた。

私は、良子と雪花と一緒に、高校から道路を挟んで反対側にあるバス停のベンチに座っていた。ベンチは屋根付きだったけれど、熱を吸っているおしりが熱かった。高校の校門前では何本もひまわりが上を向いて咲いているが、風が吹いていないのでほとんど揺れていない。時刻は十一時を少

し過ぎていて、これからさらに気温が高くなるのを示すかのように、車道の向こうでは銀色の陽炎が現れていた。

今日は良子が歌の大会に出る日だった。私たちは彼女の応援のため、大会会場のホールへ向かうバスを待っていた。

「いよいよだね。ずっと楽しみにしていたけれど、いざその日になると、すごく緊張するよ……」

日が沈んだ後の空のような紺色のワンピースを着て、黄色いリボンの麦わら帽子を被った良子は、そわそわと手を組んだまま、バスが来る方向と私たちを見比べている。

私は灰色のチューリップハットを被り直して、いつもの眼鏡もかけ直してから笑う。

「確かに、初めて人前で歌うから、緊張はするよ。でも、今日は良子が一番好きなきな唄を歌うんでしょ？ 自信もって、堂々とすれば、大丈夫だから」

「うん。私たちも応援しているから、いつも通りに歌ってね」

白いつば広帽の下で眩しそうに目を細めながら、水色のロングスカート
の足を綺麗にそろえたまま座る雪花は、にこにこしながら良子を励ました。

それを受けて良子は、まだ表情が硬いながらも、力強く頷いてくれた。

「ありがとう。なんだか、頑張れるような気がしてきた」

「そうそう。でも、あまり気張り過ぎないようにね。今日が夢の第一歩だから」

「観客は結構いるのかもしれないけれど、これよりもっと大人数の前で歌う日が、きつと来るわ」

私と雪花の話聞いた良子は、段々といつもの元気を取り戻し、ほんのりと赤くなつた頬で「そうだね、そうだね」と何度も首を縦に振った。

丁度一週間くらい前に、良子は私たちに、「歌手になりたい」という夢を教えてくれた。それを叶えるために、いつもは家事をしながら、お風呂

に入りながら、歌の練習をしているという。まだ大会などには出たことが無かったが、一学期の初めの頃から、七月に開かれるこの大会のことが気になっていった。

でも、夢のためとは言え、誰の応援もなしに出るのはやっぱり恥ずかしい。お母さんには仕事で、弟たちには部活があるから誘えなくて、どうしようか悩んでいるのだと、良子から相談された時に、私と雪花は絶対に応援に行くから、出てみようよと背中を押した。

それから、私と雪花は良子に内緒で、バスタオルくらいの大きさの垂れ幕を作った。シンプルに、「良子ガンバレ！」という文字が、色んな花に囲まれている垂れ幕だけれど、雪花による良子の似顔絵がのせられた、とっておきのものだ。それは今、私が抱えている、大きなリュックサックの中に入っている。

良子の初舞台とは別に、この垂れ幕を見たら良子はどんな顔をするのか

を、私と雪花は楽しみにしていた。

バスが到着するまで、まだ時間があるので、雪花がのんびりと良子に尋ねた。

「もしも、夢が叶ったら、良子は何をやりたい？」

「お母さんと弟たちに楽をさせたいな。それから、立派な家を建てたい」

良子はしゃんと背筋を伸ばして、はっきりと宣言する。

そういえば、雪花がディスレクシアだという告白を聞いた後から、良子は自分の家庭環境を自虐的に話すことが無くなっていった。あれは自分を受け入れてもらうための、良子の術なのかもしれない。正直、それに困惑することはあったけれど、言わなくなったということは、私たちに心を許してくれたということだろうか。そうだったらいいな。

「私は絶対に夢を叶えるから、雪花も漫画家になる夢、諦めないでね」

突然良子が真剣な顔でそう言うので、雪花は面食らいながらも、「当た

り前でしょ」と相好を崩しながら言った。

「それで、もしも雪花の漫画がアニメ化したら、私とその主題歌を歌うよ」
「良子だったら、気が早いよ」

良子がまた真剣に将来設計を語るので、雪花は「あはは」と声に出して笑う。その笑い声は、夏真つ盛りの群青色した空に吸い込まれていった。

「そう言えば、すずえの夢って何？」

笑いが収まった雪花が、急にこちらの方を見たので、私はちよつと驚いてしまった。

確かに、三人で色んな話をしたけれど、私の夢についてはまだ喋ったことが無かった。二人がわくわくしながらこちらに耳を傾けているので、私も自然と胸を高鳴らせながら、初めて、小学生の頃からの夢を誰かに教えようと、口を開いた。

「私の夢はね、」

「あ、バス、来た！」

その時、私の後ろの方を見て、良子がそう叫んで立ち上がった。彼女の言葉通り、山盛りになった入道雲をバックにして、白地に青いラインの入ったバスが、真っ直ぐこちらに走ってくる。

私と雪花も立ち上がる。私は膝にのせていたリュックを背負い、雪花はスカートの埃をはたいていた。そして、申し訳なさそうに私の顔を覗き込んだ。

「ごめんね、すずえ。話の途中だったけど」

「いいの、気にしないで」

「さあ、いよいよ出発だ！」

バスが近付いてくると、良子は準備体操するように背伸びを繰り返し、閉じたままの唇は、興奮してむによむによと動いていた。

私の夢は、ラジオのパーソナリテイになることだった。毎日ラジオを聞

きながら、将来の自分がリスナーからのメールを紹介したり、リクエストに応えたり、自分の身の回りの話をしたり、聞いている人が笑顔でまた一日を頑張れるようなラジオ番組を届けたいなと夢見ていた。

もしも三人とも夢を叶えることが出来たなら、私のラジオにゲストとして良子と雪花を呼びたい。良子の生歌を聴いて、雪花の今の連載の話をして、またみんなで他愛のないお喋りをしたい。すでにそんなことを考えてしまうほど、私の心は浮足立っていた。

実際にはまだ、私の夢を話してはいない。でも、焦りとかは無かった。これから三人で過ごす時間はいくらでもあるのだから、いつの日か、話すチャンスが来るはずだ。その時に、私のラジオに二人を呼ぶ想像も、一緒に話してしまおう。きっと良子は「楽しそう！」と笑って、雪花は「ちよつと気が早くない？」と苦笑するのもかもしれない。

体験学習の日に、初めて二人と話してから約三カ月、私はふと気づいた

ことがある。それは、全く自分と同じ人はいないということ、それと同時に、特別な人もいないということだった。私はずっと、友達になるためには、どこか相手と共通点が必要なのだと、無意識に思っていた。しかしそれは、ただのきっかけに過ぎず、共通点だと思っていたことも微妙に違っていることもあるから、大した問題にはならない。自分と正反対だと思っていた相手とも、ちょっとしたこと、秘密や夢を打ち明け合う友達にだつてなれる。その「ちょっとしたこと」の正体は、誰もが持っている小さな勇気なんだ。

ルートビアを飲んだことが無い。たったそれだけの、あっさりと崩れてしまいそうな私たちの共通点。それでも、雪花と良子とは、いつまでも友達でいられる。二人の屈託のない笑顔を見ると、根拠は無くても、そんな気持ちの方が沸き上がってくる。

——バスが速度を下げていき、私の真横にドアが来るようにぴつたりと

止まった。ドアが開くと、先に乗客が二人降りてくる。

「なんだか私までドキドキしてきちゃった」

「あと一時間くらいしたら本番かー」

雪花は自分の胸を押さえて深呼吸を繰り返し、良子は少し落ち着いて感慨深そうに呟いた。

南の島の暑さが、私たちを、見慣れた街の景色を、どこまでも青い空も、じりじりと熱して、浮かれさせているようだった。

「じゃあ、行こうか」

私は振り返ると、良子は眩い笑顔で、雪花少しはにかみながら頷いた。

夏はまだ、始まったばかりだ。

(了)